

曉あかつき順じゆん城門じやうもんをい出い何か大たい虚きよをおも懐う有あり
掲か俟たい斯し

歩ほして出いず城じやう南なんの門もん
悵ちやう望ぼうす江かう南なんの路みち

前ぜん日じつ風かう雨うの中うち
故こ人じん此これより去されり

【作者】 掲俟斯（一二七四～一三四四年）・中国，元の学者。竜興富州（江西省豊城県）の人。字は曼碩（まんせき）。前後して湖南廉訪使にな

った程鉅夫（ていきよふ）、盧執（ろし）らに認められ、程鉅夫の従妹と結婚、盧執の推薦によって仁宗の延祐元年（一三二四年）翰林
国史院編修官に就任。以来中央にあつて諸帝に仕え、その博識と文才を傾けて活躍した。順帝の命により遼・金・宋三史編纂の総裁官
に列し、《遼史》を完成。《金史》編纂中に死した。書は端正古雅、とくに行書にすぐれていた。

【通釈】 夜明けに都城の南門を歩み出て、はるか江南へと続く道を、思いに深く沈みつつながめやった。

先日、雨風野ひどいさ中に、友人、何太虚はここを去っていったのであったが、彼は一体無事でいるだろうか。